

大正時代前半 常呂尋常小学校時代の漁場での手伝いや毛ガニ拾いの思い出

*昭和59年10月に、長船（旧姓：大島）みよさんに聞き取りした原稿を編集したものです。原文は、質問に答える形式ですが、

質問部分を省き、話し言葉を「でした・ました」に変えています。

*長船みよさんは、大正9年3月に常呂尋常高等小学校卒業

長船：私の親は、はじめは漁場をやっていて、私が子どもの頃は力キなどの仲買をしていて、家は今の大島の冷蔵庫（中央児童公園裏手・北側あたり）近くにありました。当時、常呂川にはマスやアキアジがとっててもたくさん上ってました。2〜3時間おきくらいに網を起すとマスがそれこそたいした獲れました。それを女の出面さんを2人頼んで、川の向こうからこっち側へ舟で渡してきます。それを私たちが手伝うのです。私の父親はとてもやかましい人だったから6年生くらいまでやらされました。

ニシンがうんと獲れた時もそうです。夕方、夕陽が映える頃にニシンの群来があると波の色が変わります。そうすると明日の朝はニシンが大漁だから、市街地へモッコしよい（担ぎ）を頼んでこいと父親に言われました。

長船：浜辺の波打ち際を歩くと毛ガニがブクブクって紫色の泡を吹いてたくさんいるのです。大きいのを10杯くらい、持って帰れないくらい拾ったものです。なんぼでもいました。春先になって海岸から氷が離れるとき、竹竿に針金を付けて曲げ、氷の上に行ってカニを拾ってこられたものです。